**幾度となく会い、語りあうことの意味**

主発表者：本間　毅（退院支援研究会）

【はじめに】

よく、｢不安｣は対象のない漠然とした心象のひとつで、具体的な対象があるのは「心配」だと言われます。しかしクライエントの心の動揺に耳を傾けていると、「心配」のように聞こえる「不安」やその逆があり、ひょっとしてクライエント自身もその違いに気付いていないのではと思うことがあります。クライエントとその家族に近づきつつある「死への不安」を、医療者が「特定の疾患や臓器に対する心配」と誤解してしまうと、結果によらずクライエントだけでなく医療者も不幸にしてしまう。だからこそ、専門家と自認するものには、心配を解決する得意分野の技量と同じように、クライエントとともに不安解消への道筋を見据える眼差しが求められるのでしょう。

【事例】

今回私が提示する事例は、生後半年で罹患した髄膜炎の合併症に対し、7回にわたり手術を受けたにもかかわらず障害は徐々に重くなり、コロナ禍の少し前に50年余りの生涯を終えて死亡退院された男性患者Mさん。そして我々医療者やMさんだけでなく、過去と決別しようとしないご自分と「幾度となく会い、語りあった」Mさんのお母さんです。

研究の対象とすることは、退院後に担当看護師同席のもとで私が説明し、お母さんからご同意をいただきました。商業的利益相反事項はありません。

【考察】

コロナ禍の現在、差し入れやお見舞いはおろか、わずかな時間の面会すら厳重に制限される医療・介護・福祉施設では、感染の可能性がさほど高くない利用者さえ「入院や入所は今生の別れ｣とばかりに涙を流し、家族や友人との別れを惜しむ光景を目の当たりにする日々が続いています。修正や削除ができる文字と異なり、およそ言葉には対話や告白、独り言にさえ、語る者の夢や思い出にひとしい、合理的ではないかも知れないが価値がある何ものかがあるようだ。今だからこそ、この「気づき」について考察したいと思います。